

P11

上顎犬歯の牽引誘導を行った1例

○津田裕子, 廣田和子*, 平野洋子**

(津田歯科医院, *廣田歯科医院,
**医療法人社団秀和会小倉南歯科医院)

【目的】 萌出障害の早期発見・適切な時期の治療は、健全な口腔の育成にとって重要だが、萌出障害の早期発見は、保護者には困難であり、歯科医師に委ねられている。この度3歳から口腔管理をしている女兒の、ⅢA期検診時のパノラマエックス線写真にて上顎犬歯の萌出障害を認め、牽引誘導した一例を報告する。

【症例と経過】

[2015年3月(9歳2か月)]

萌出歯 $\frac{6\ EDC\ 1}{6\ EDC\ 2\ 1} \mid \frac{1\ BCDE\ 6}{1\ 2\ CDE\ 6}$

C|Cに動揺はなく、2|2に萌出遅延を認めた。パノラマエックス線検査で、上顎骨内の犬歯の近心傾斜角度は右側が左側に比べやや大きく、3|の尖頭が矮小歯の2|長軸と近接していた。

[2016年4月(10歳2か月)]

萌出歯 $\frac{6\ EDC\ 2\ 1}{6\ EDC\ 2\ 1} \mid \frac{1\ 2\ CDE\ 6}{1\ 2\ C\ 4\ E\ 6}$

2|は唇側傾斜し、C|Cの動揺に左右差を認めた。パノラマエックス線検査で、上顎骨内犬歯の近心傾斜角度に明らかな左右差があり、3|尖頭は1|歯根位置近くまで移動していた。その後CT検査を行い、上顎骨内の犬歯とその周辺歯の位置関係を確認し、患者の誘導処置に対する希望を考慮した結果、2|を抜歯後、2|部に3|の萌出誘導を行うこととした。

2|抜歯と3|の開窓および結紮線付きリングボタンの接着を同日に行った。後日、アーム付きリングアーチと、患歯に接着した結紮線とをひも状のエラスティックで結紮して牽引開始し、約1年で誘導終了した。その後、レジンにて3|の歯冠形態を修正した。

【結果と考察】 ⅢA期に乳犬歯の交換状態や、側切歯の歯軸に左右差があれば、犬歯の萌出障害が疑われ、パノラマエックス線写真はその診断に有効で、CT画像は萌出障害歯の隣接歯根への影響の把握や開窓牽引方向などの確認に有用であった。側切歯萌出前でも、顎骨内で側切歯歯根と犬歯歯冠に重なりがある場合は、口腔内所見が表れる前の段階で短い間隔の検査を検討する必要があると考える。

P12

歯冠軸90度以上で埋伏した永久中切歯を低年齢で牽引した1例

○小笠原貴子¹⁾、高山扶美子¹⁾、廣藤雄太²⁾、山座治義²⁾、福本敏²⁾

¹⁾九州大病院 小児歯科・スペシャルニーズ歯科

²⁾九州大学大学院歯学研究院 口腔保健推進学講座 小児口腔医学分野

【緒言】 小児歯科では、先行乳歯の外傷やその後の根尖性歯周炎に起因する永久歯の埋伏に遭遇することがある。今回、就学前から牽引した症例を供覧する。

【初診時現症と経過】 左上乳中切歯の外傷、その後の根尖性歯周炎に対し、近医で感染根管処置を受けた患児。その後、左上永久中切歯の方向異常を指摘された。前医で左上乳中切歯の抜歯を提案されたが、川崎病に伴う冠動脈瘤のため、当科での抜歯を希望され、当科初診。

左上永久中切歯は切縁を唇側に向けており、萌出方向改善を期待して先行乳歯を抜歯し、小児義歯を装着した。経過観察中に左上永久中切歯は水平埋伏からさらに鼻腔側方向へ成長した。歯根形成も進んだが歯冠との角度が強く、今後牽引困難になることが予想されたため、早期に牽引を開始した。歯冠は萌出したが歯根形成はまだ経過観察中である。

【考察】 埋伏歯の牽引は、歯冠の位置と方向、歯根形成度と湾曲度、患児の協力度など、複数の因子を加味して決定する。本症例は低年齢で、まだ萌出時期になっておらず埋伏歯とは定義できない時期であったが、現時点で牽引しなければ確実に抜歯になると判断し、早期の牽引開始を決定した。今後、歯根形成を追っていき、治療開始時期が適当であったかどうかも含めて経過を見ていく必要がある。